

令和6年度教育福祉産業常任委員会行政視察報告

1. 視察日 令和6年7月8日（月曜日）から10日（水曜日）まで

2. 視察地と視察項目

①宮城県大和町

面積 225.49 Km²

人口 27,908 人(令和6年6月末)

・企業誘致の取組について

②岩手県紫波町

面積 238.8 Km²

人口 32,730 人(令和6年6月末)

・図書館を中核とした公民連携の地域活性化について

③福島県三春町

面積 72.76 Km²

人口 16,337 人(令和6年6月1日)

・旧沢石小学校の福祉型農業施設としての活用について

3 視察概要

教育福祉産業常任委員会では、矢板市が策定した「やいた創生未来プラン（以下、プランという。）」を基に、市の抱える課題等を踏まえ、視察先について検討を重ね決定いたしました。

宮城県大和町:プランで特に重要な施策として「企業誘致の推進」が掲げられていることから、大和町における企業誘致の取組を視察し、成功事例を学びました。

岩手県紫波町（紫波町図書館）:プランの中では市図書館の市民満足度が高いことに着目し、市図書館のさらなる活用を考えるため、図書館を中核とした公民連携による地域活性化の取り組みを伺いました。

福島県三春町（旧沢石小学校）:プランにおける「障がい者の地域生活の基盤

づくり」と現在進められている学校の統合後の廃校利用という観点から、福祉型農業施設としての活用事例を視察しました。

4 出席者：

委員長	宮本 莊山
副委員長	掛下 法示
委員	渡邊 英子
委員	齋藤 典子
委員	高瀬 由子
委員	小林 勇治
委員	佐貴 薫
随行	斎藤 隆之（商工観光課課長補佐）
随行	粕谷 嘉彦（議会事務局副主幹）

5 視察内容

宮城県大和町（7月8日午後1時40分～3時40分）

視察目的 企業誘致の取組について

大和町出席者	大和町長	浅野俊彦
	大和町議会議長	今野善行
	大和町議会運営委員会委員長	槻田雅之
	大和町商工観光課長	蜂谷祐士
	大和町商工観光課企業立地推進室長	星 正己
	大和町議会事務局長	櫻井修一

大和町の企業誘致の背景

農業から工業へ

大和町は、かつては水稻農業が中心でしたが、農業機械化が進み、若者が都市へ流出。町は人口減少と通勤流出をくい止める政策の一つとして、成長性と安定性のある企業を誘致し、若年者が地元にいながらにして勤められる新たな職場開拓のため工業団地を造成し、企業誘致を開始しました。

大和町の交通網

大和町は仙台市に隣接しており、町内にインターチェンジのある「東北自動車道」をはじめ、国際定期便が運行されている「仙台空港」、台湾・北米・中国・韓国への国際コンテナ定期航路などが運行されている「仙台国際貿易港」、東京と仙台を1時間30分で結ぶ「東北新幹線」などアクセスの良さが、大和町の工業団地の強みとなっています。

大和町の工業団地

大和町には次の4つの工業団地が整備されています。

・第一仙台北部中核工業団地

大和町で最も面積の大きな工業団地で、製造業を中心に多くの企業が立地しています。

進出企業の事業：デジタルカメラの開発、ステンレス加工、医薬品・衛生用品製造、切削工具製造、自動車部品製造、乳製品製造、運送業など

・大和リサーチパーク

研究開発型の企業の集積を目指しており、先端技術産業の育成に力を入れています。大学との連携も積極的に行われています。

進出企業の事業：半導体製造装置、医用電子機器、医用電子機器、新聞印刷など

・大和流通・工業団地

隣接する大衡村に自動車の完成車工場が進出していることにより、EV用バッテリー工場などが進出しています。

進出企業の事業：自動車部品製造、運送業など

・大和インター周辺流通団地

物流業を中心に、様々な業種の企業が進出しています。交通アクセスが良く、物流拠点としての機能が期待されています。

進出企業の事業：運送業、精米工場、医薬品販売、生産設備設計製造など



大和リサーチパーク



大和流通・工業団地



大和インター周辺流通団地



企業誘致への取組

組織体制

大和町は、宮城県が設置している東京事務所へも職員を派遣し、そこを拠点

として首都圏の企業の情報収集、誘致活動を行ってきました。また、宮城県大衡村への半導体製造工場進出を受け、大和町では企業立地推進室を新設し、半導体関連産業の誘致・集積を推進しています。

時代に対応した工業団地の整備

企業立地推進室は企業のニーズを調査し、事業に合わせた区画の造成や工業用水などのインフラ整備を行っています。

大和町の森林面積は約 7 割を占めていますが、企業の事業に合わせて造成を行っています。柔軟な対応が魅力の一つとなっています。

現在の企業誘致においては大量の工業用水の確保が重要であり、大和町の工業団地には、宮城県が主導し岩手県境のダムなど 40Km 遠方より工業用水を引いています。時代に合わせたインフラの整備も併せて検討する必要があります。

企業との信頼関係の構築

全国各地の自治体で同様の優遇制度があるため、企業誘致は「足で稼ぐ」ことが重要です。大和町では、年間 50 社ほど訪問しているとのことでした。

企業との信頼関係を築くために、コミュニケーションを密に行い、丁寧で誠実な対応を行っています。

企業誘致による地域経済への効果

企業誘致は、雇用機会の拡大、税収の増加、関連産業の集積など、地域経済を活性化させました。

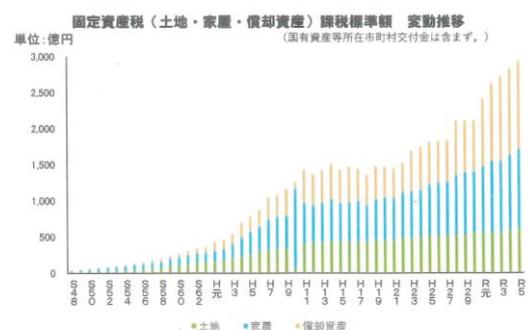
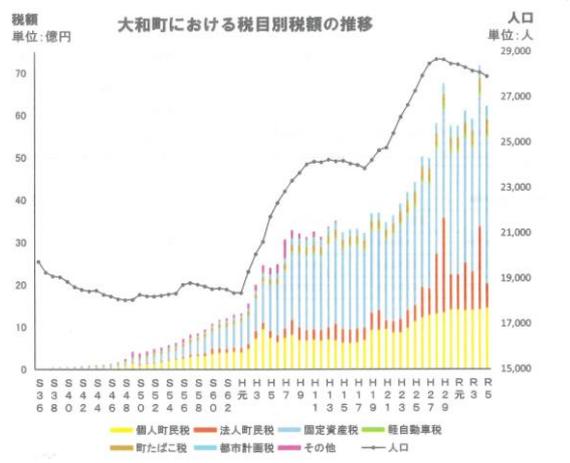
人口増加と経済成長

企業進出を契機に、人口は昭和 60 年の 18,768 人から令和 5 年には 27,908 人と増加しており、令和 4 年には製造品出荷額 80,176,639 万円、製造業従事者数 8,678 人に達しています。

町の企業立地推進室では、高校生向けに産業説明会を開催し、地元にながら就職ができるようサポートを行っています。これにより人口の流出を抑えています。

町の財政面の安定

固定資産税は昭和48年時点で約50億円でしたが、令和5年には約3,000億円まで増加したほか、事業税、住民税により税収が増加し、町の財政面の安定につながっています。



大和町の視察を踏まえて

大和町と矢板市は人口や土地面積・可住地面積、山が多い点で共通点があります。矢板市では新たに工業団地を検討していますが、平地だけでなく山林の造成も含め検討することで誘致の可能性が広がると感じました。併せて、企業のニーズに対応し工業用水の確保などのインフラの整備も行わなければなりません。矢板市の主要産業である農業とのバランスを考えた水源の確保が重要です。

一方、企業への渉外において、最も重要なことは市の職員と企業担当者との信頼関係だと認識しました。時代の変化が著しい中であって、企業が安心して経営できるよう、企業と歩調を合わせた取り組



みが求められています。

財政面においては経済活動が行われることが、地方自治体を成立させる根幹であると改めて感じたところです。魅力的な企業が存在し、関連企業がさらに集積され、人が行きかい、経済活動が行われ資金が循環する。地域が活性化する様子を大和町で感じることができました。

岩手県紫波町（7月9日午前10時00分～12時00分）

視察目的 図書館を中核とした公民連携の地域活性化について

紫波町出席者 紫波町情報交流館館長 藤尾智子

オガールプロジェクトの概要と図書館の位置づけ

紫波町のオガールプロジェクトは、大学や民間企業の力を活用し、「未来にわたって人、素材、文化、資金が“循環”するまち」を実現するため、生活基盤に直結する施設を集約・整備することで、都市と農村の新しい結びつきを創出し、持続可能なまちづくりを目指す大規模なプロジェクトです。

町有地 10.7ha の「塩漬け公共用地」を有効活用するため、平成 21 年に紫波町公民連携基本計画が策定されました。この計画に基づき始まった、紫波中央駅前都市整備事業が「オガールプロジェクト」であり、このプロジェクトの中核を担うのが、図書館です。

オガールの名前の由来は、【成長】を意味する紫波の方言【おがる】と【駅】を意味するフランス語【Gare】を組み合わせた造語であり、紫波中央駅前を「紫波の未来を創造する出発駅」とする決意とこのエリアを出発点として、紫波が持続的に成長していく願いを込めてオガールと名付けられました。



- ・町の歴史・風土に出会う環境があること
- ・農業などの地域産業に役立つ情報が活用されること
- ・医療など生活の質向上に役に立つ資料や情報を充実させること

紫波町図書館の魅力と地域への貢献

紫波町図書館は、これらの構想と目標を達成するための取組を行っています。

企画展示と地域支援

住民の課題や関心事を行政・図書館・大学・関係機関が共有し、その解決につながるよう、企画展示を行っています。例えば、農業被害については現場からの提供情報、専門家のインタビュー記事、関連図書を、展示ブースを設置し分かりやすく情報を提供しています。

「知りたい」「学びたい」「遊びたい」を支援する企画連携イベント

入選作品を製本して図書館に展示する「調べる学習コンクール」や平日に来られない大人を対象にリラックスした空間を提供する「夜のとしよかん」、夜の音楽コンサート、紫波町版コミックマーケット、ビアフェスト（屋外イベント）など、図書館独自の企画や地域住民との協働によるプログラムの企画など、地域の中心的な拠点としての活動も積極的に行われています。



公共サービスの価値の最大化のための都市設計

町役場や図書館、スポーツ施設、保育所、商業施設（飲食店、学習塾、直売所）、医療機関、公園を集約することにより利便性の向上と相乗効果が生まれるよう考えられています。また図書館にはホールや音楽スタジオ、キッチンスタジオ、フリースペースが一体となっており、常に人が往来する施設として設計されています。

これらは公民連携（PPP：パブリックプライベートパートナーシップ）により、維持財源を確保することで建設可能となりました。オガールプロジェクトでは、民間の刺激を受けて、公共サービスの価値の最大化を目指す。図書館はそのエンジンとなっています。

紫波町図書館の視察を踏まえて

紫波町図書館の視察から、図書館は単なる蔵書施設ではなく、地域住民が集い、交流できる複合的な拠点となり得ることが分かりました。

現在の矢板市の施設を考えると、図書館と体育施設、温泉施設、公園などの施設は集約されていません。

矢板市図書館では、ネット予約、電子図書館、定期的なイベント開催など、魅力的なサービスを充実しているところですが、ほかの施設との連携により、さらなる公共サービスの価値向上を期待できます。

そのためには、図書館が住民、企業、大学などの機関との連携をはかり、異なる立場から図書館の在り方について考え、図書館の提供するサービス、図書館と周辺の施設を含め人の流れを考えた都市設計といった、ソフト面とハード面を組み合わせた価値を創造していくことが必要と感じました。



福島県三春町（7月10日午前10時00分～12時00分）

視察目的 旧沢石小学校の福祉型農業施設としての活用について

三春町出席者 三春町財務課管理契約グループ長 松崎浩仲
三春町財務課管理契約グループ主事 冨塚善斗
株式会社福島あすなる会代表取締役 大橋栄喜
株式会社福島あすなる会管理者 山口彩夏

旧沢石小学校活用の背景と経緯

全国的に廃校が増加する中、三春町でも学校の統合が進められています。町では、地域住民の意見を尊重し、福島あすなる会が運営する就労継続支援 B 型事業所「三春あすなる会」として、廃校を転換しました。今回は、施設を運営する福島あすなる会のお二人から、廃校活用の状況を伺いました。

現在の事業内容に至るまで

この活用は、福島あすなる会が、農林水産省が主導した「中山間地域等の活性化のための空き家・廃校等を活用した農山漁村集落拠点づくり」事業に応募したことがきっかけです。当初はこの交付金を活用し、障がい者の働く場として農福連携による植物工場を運営する構想でしたが、実際に鉄筋コンクリート造の校舎の状況を踏まえ、配管などの整備が困難であることから断念しました。

現在では、「～未来につなごう～「みんなの廃校」プロジェクト」に参加し、障がい者の就労支援施設として利用されています。

地域との共存を目指す

福島あすなる会では、運営面での調整を行う一方で、地域住民との調整も丁寧に行ってきました。旧沢石小学校が「地域のシンボル」であることを念頭に置き、地域住民向けの説明会や協議を重ねています。また、隣接地に移転した新沢石小学校の体育館の清掃や児童との交流により地域との良好な関係を築いています。

廃校の活用内容とメリット・デメリット

校舎は主に部品製造の作業所として活用され、農業施設としては季節限定でしいたけの生産にも活用されています。作業所において利用者の自立を促し、清

掃・除草作業、農家での作業の補助により利用者への工賃の支払いと運営費を賄っています。

メリット

現在、この施設では25名の利用者が、それぞれのペースで作業に取り組んでいます。

障がい者が通う施設という点において、校舎は学校を卒業したばかりの利用者にとっては、環境の変化が少ないことから、心に安らぎを与え、作業へ意欲の向上につながっています。利用者の体調により落ち着かない時には、別室を利用することもでき、臨機応変に対応することができます。

また、部屋ごとに作業内容が異なり、利用者に合わせた作業内容を用意することができます。

そのほか、小学校だった当時の備品を活用することができ、長机をシイタケ栽培の菌床棚として利用していました。

デメリット

費用面では、鉄骨コンクリート造りの校舎の改修費が高額となります。さらに、建物の用途変更による防火設備の整備費用も必要となります。小資金で事業を始めた福島あすなる会にとって大きな負担となり、農作物の売り上げで運営するという植物工場としての構想を練り直す必要に迫られました。

三春あすなる会
一日の流れ

旧校舎活用プロジェクト
校舎として使われていた広いスペースを活かし、2階ではいたけの栽培を行っています。他にも広い作業部屋や園芸が6つ以上あり、作業や体調に合わせて過ごしたい場所を選択することができます。

自分にあつたお仕事選び
内職作業または建物内外の清掃・除草作業や畑作業など、様々なお仕事の中から自分が「やりたい」「やってみたい」お仕事を選択し取り組むことができます。
*活動における収入は利用されている方へ工資としてお支払いします

使命
三春町内だけでなく、田村市、郡山市、本宮市、小野町などに送迎車を運行しています。希望される方はご連絡ください。(原則無料)

月1回のリフレッシュ!
月1回の息抜きにお弁当を注文したり季節に合わせたお花見・クリスマス会などを開催したりしています。

あすなる会での過ごし方

1. 楽しくはたらく
2. 無理をしない、自分のペースで
3. やってみたいことは挑戦してみる
4. 人との関わり方を学ぶ

9:30～ 朝礼
9:45～ 午前の作業 (途中15分休憩)
12:00～ お昼休憩
13:00～ 午後の作業 (途中15分休憩)
4:50～ 片づけ・掃除
5:00～ 一日の記録を行い帰宅



そのほか、利用に当たっては、校舎内でのしいたけの生産において、菌床を取り扱うことから、湿気によるカビの発生が教室を痛めるため再考を強いられています。

今後の課題と展望

施設は利用者にとって受け皿となっているため、安定した運営が不可欠です。

収益を向上させるため、広い校庭を活用してビニールハウスを設置し、シイタケ栽培の効率化を高めるとともに、移動販売車などにより販路拡大を計画しています。

また、派遣による一般就労は時間あたりの単価が高いことから、利用者には一般就労に向けた支援を強化することを併せて進めています。

旧沢石小学校の視察を踏まえて

「今後も大変ではあるが事業を続けたい。選ばれる事業所を作っていきたい。この事業所で、就労することができ、雇用の機会を保っていくことによって障がい者の福祉の向上にお手伝いしたい。」と心強く話され、責任をもって事業に当たっている様子に感銘を受けました。



もし途中で事業が継続できなくなるとき、ここで働いている障がい者のみんなはどうになってしまうのか。今やなくてはならない新たな「地域のシンボル」となっています。

矢板市では今後も小中学校適正規模・適正配置計画に基づく学校の統合により廃校が増えてまいります。

廃校を活用するにあたっては、地域のニーズを調査し、建物の歴史や特徴を生かし、魅力的なコンテンツの提供につながるよう、地域住民・事業者・自治体が連携して、持続可能な運営体制を築いていくことが重要だと感じました。

以上で教育福祉産業常任委員会の行政視察報告を終わります。